

タイ農村における集団の形態

——ワット委員会・学校委員会の機能分析を中心として——

綾 部 恒 雄*

Associations in a Thai Rural Community

Functional Analysis of *Wat* and School Committies

by

Tsuneo AYABE

は じ め に

タイ国の農村にはいかなる社会集団があり、それがどのような形態をもち社会的機能を果たしているかという問題を、正面から捉えて考察した集団論的研究はまだ現われていないようである。タイ農村における家族や一種の親族集団としての「ピー・ノン・カン」「クルア・ディアウ・カン」について、「チュエイ・カン」のような相互扶助的共同労働集団や寺について論じたものはあるが、こうした社会集団が相互にどのような関係にあるかを、総合的・全体的に分析するまでには至っていない。親族組織の研究をも含めて、タイ農村における社会構造分析の水準が必ずしも高くないのは、社会人類学的研究の伝統が浅いことのほかに、タイ農村社会の集団の仕組みが、たとえばアフリカやオーストラリア原住民社会に頻繁にみられるように、親族組織の上でもまたその他の社会集団においても、社会人類学者の興味を惹くような高度の組織性や複雑な網の目をめぐらしていないかのように一見観察されるからである。またタイの農村では、神と人と土地を結びつける呪術・宗教的な伝統や慣習法的慣行が、たとえば核家族的で比較的構造規範のゆるいといわれるジャワの自然村的村落共同体（デサ）にみられるほどにも組織化されておらず、代わって仏教の力があまりにも強く前面に押しだされすぎているかにみられるからでもあろう。Embree の指摘¹⁾以来、タイ社会はいわゆる‘弛緩した構造’（それが事実であるかどうかは別として）をもつものと考えられることが多い。しかしそれは直ちにこの社会が単純であるとか、組織性をもたないとかということを意味するものではないので

* 九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設

1) Embree, John F. 1950. "Thailand—a Loosely Structured Social System," *Am. Anthr.*, 52, 181-193.
なお、この論文については、タイ人を含む8人の学者のシンポジウムがある。Hans-Dieter Evers, (ed.), 1969. *Loosely Structured Social System: Thailand in Comparative Perspective*. Yale University, Southeast Asia Studies. Cultural Report Series No. 17.

ある。

またタイ農村には社会集団の数がきわめて少ないともいわれる。日本の農村における組や部落が、様々な集団の累積的全体であるという意味では、タイ農村における「タムボン」(村)や「ムーバン」(部落)も同じであるが、そうした集団の累積のあり方にはかなりのちがいがみられる。また氏子集団、檀徒集団、講中集団などの宗教的団体のほかに、青年団や婦人会のような性や年齢にもとづく集団、官設的経済的集団その他が多数みうけられる日本の場合とでは、タイ農村は集団の多様さにおいてもちがいがあると言えるかもしれない。しかし、長く複雑な文化的伝統に培われ、適当な人口を伴った人間の集団が一定地域に定着して生活してゆく場合には、文化のちがいによって集団の数や機能に何らかの差は生ずるにしても、それなりに複雑な社会機構を必ず伴うものである。ともに儒教の影響を受け、祖先崇拜によるタテの系譜意識が強く、村落内の階層化がすすんでいる日本やベトナムなどの伝統的農村に比べて、タイ農村の社会規範は一般にゆるいとは言えるかもしれないが、コミュニティがその生活を現実に運営してゆくためには、政治、経済、社会、宗教、教育その他様々な必要に応じて多角的にこれに対応し、問題进行处理してゆかねばならない。そして、そのための仕組みが必要であることは、タイ農村といえども他の文化の場合と何ら異なるところがないはずである。それでは、近代化の波を受け変化の激しいタイ農村は、このようなコミュニティの多様な必要性に、どのような集団の仕組みで対処してきているのであろうか。集団を取りあげる場合には、ゲマインシャフトやゲゼルシャフト、一次集団や二次集団のような理念型を論ずる類型論、メンバーの役割や位置を論ずる構造論などさまざまな接近の方法があるが、本論は上記のようなタイ社会についての疑問に多少とも答える意味で、寺および小学校の補助集団としてのワット委員会と学校委員会の機能分析を中心に、タイ農村における集団の形態を探ろうと試みたものである。

Ⅰ タイ農村における3大‘親’集団

タイの地方行政区域は「チャンワット」(県)の下に「アンプー」(郡)がおかれ、その下に「タムボン」(村)とよばれる日本の村(区)に相当する行政区がある。タムボンは幾つかの「ムーバン」(部落)から構成されるのが普通である。タムボンはその中にひとつないしは複数の寺と小学校をもっているものが多い。ところで、タイの農村では一般にこうした寺と小学校を中心に、行政区域とはかなりずれた形で、住民の実際生活上のコミュニティが形成されているといえる。つまり家族員がどの「ワット」(寺)と最も関係が深いかということと、子供がどの小学校へ通っているかということを中心に、ゆるい生活共同意識に支えられた地域社会(コミュニティ)が構成されているのである。自然村的な集落としてのムーバン内に、ワットも小学校もない場合もないではないが、この場合は、自然村的な集落の形態からくる近隣性や、タイの自然村的集落が必ずと言ってよいほど持っている共同のサンチャオ(村の守護神な

いしは土地神）信仰などが、住民のコミュニティ意識を支えているものと思われる。

このような意味でのタイ農村のコミュニティにおける社会集団をみると、家族、小学校および寺という3者の役割がきわだって大きく、他には目ぼしい安定した社会集団をみつけにくいことがわかる。祖先崇拜の習がきわめて弱く、タテの血縁の系譜をあまり重視しないタイ社会では、家族の形態も核家族的傾向が強く、家族より規模の大きいリネージや氏族のような明白な親族集団はみられないし、寺をめぐる檀徒集団のごときものもない。また年齢集団や男子結社のようなものも存在しないのである。しかしよく調べてみると、タイ村落におけるこれらの社会集団は、現実生活に多様に対応してゆくために、必要に応じて小組織集団を随時つくりあげ、臨機応変に‘親’組織のニードを満たしてきているようである。稲刈に際して、家族を中心にチュエイ・カン・グループをつくる慣習、政府の政策や課外活動の必要に応じて、政府に直属し政府直轄の小学校と密着した形で組織化された近代的ボーイ・スカウト（ルーク・スア〔虎の子〕）やレッド・クロスなどの組織はそのよい例であろう。財源をふやすための組織として寺に設けられたワット委員会（カナカマカン・ワット）²⁾、小学校に設けられた学校委員会（カナカマカン・ローングリーンエン）もまた、形態的には‘親’組織から派生した同じような補助集団とよびうる性格のものと思う。

本論では、タイ農村コミュニティにおける3大集団のうち、家族をのぞいた二つの‘親’集団、すなわち寺と小学校に研究対象を限定し、この2‘親’集団が、コミュニティの中で実際に機能してゆく上でどのような補助集団を必要としているかを上記2種類のカナカマカンの機能分析を中心に考えてみることにする。したがって、ここで問題としているのは、寺と小学校という二つの集団のもつ機能そのものというよりは、両者の本来の機能をより効果あらしめるために、どのような組織上のメカニズムが働いているかを、ワット委員会と学校委員会という二つの補助集団の機能分析を通して明らかにし、タイ村落における社会集団の形態を考えてみることである。

Ⅱ バンケム村の寺と学校

さて、寺や学校のような組織が、世俗とのかかわりの強い財政上の問題を処理してゆくためには、これらの組織と社会との接点において、有効に働きうる機構が必要となってくる。ワット委員会と学校委員会は正にこうした機能を満たすべく設けられた機構にほかならないのであるが、こうした補助的ないしは派生的集団のあり方の中に、タイ農村の集団形態の特色のひとつがかくされていると思われる。ワット委員会と学校委員会の分析に入る前に、本論の基礎資料となった、両委員会が実際に活動している具体的場としての農村について若干紹介しておく。

2) カナカマカン Khaná? Kámmakaan には、「委員会」という意味のほかに、「組織」という意味もある。

(1) バンケム村 (タムボン・バンケム)

分析の対象となった資料は、1970年10月から翌71年2月にかけて、筆者が実地に調査したタイ国ペブブリ県カオヨイ郡バンケム村のワット委員会と学校委員会に関するものである。バンケム村は、バン・クルォイ、ワット・ポー、ノン・ボアおよびワット・クットという四つの部落（ムーバン）よりなっており、1964年現在647戸、人口4,718人の農業を主体とする平野村である。これらの部落は、行政上正式にはバンケム村1, 2, 3, 4というふうにナンバーでよばれている。

ところで、これらバンケム村を構成する4部落中、ワット・クットとワット・ポー部落にのみ7年制の小学校があり、ワット・ポー、ワット・クットおよびバン・クルォイの3部落にのみ寺がある。つまり、ノン・ボア部落には寺も小学校もないのである。したがって、ワット委員会と学校委員会の双方が揃っているのは、ワット・クット、ワット・ポーの両部落ということになる。

(2) クット寺とポー寺

クット寺は、行政上バンケム村の部落4（ワット・クット部落）に当たる地区にある寺である。古老の話によれば、農民の小集落があったところへ寺があとからできたものらしいが、寺建立の正確な年代は明らかでない。100年以上前に、ミーという僧がクチ（僧房）を1人で建てはじめたのが始まりであると伝えられており、こうしてできた寺が、次第にクット寺とよばれるようになったという。ミー師は10年間住職をつとめ、2代目の僧侶長チャン師は40年、3代目のチュム師は50年以上僧侶長をつとめ82才で没したという。しかし4代目のスチャー・マタチャン師はわずか6年で交代している。この間、僧房や礼拝堂などが次々と建立され、クット寺は隆盛の一途をたどった。現在の僧侶長パラット・パヨン師は5代目である。調査当時（1970年12月）僧23人、見習僧3人、デック・ワット22人がクット寺に属していた。カチン祭以前、つまり雨季の間には27人の僧が滞在していたという。

一方、ポー寺は部落2（ワット・ポー部落）地区にあり、同じく100年以上の古さをもつが、クット寺よりは多少建立があとになるらしい。バンケム村にある二つの市場（タラート）や商業地区が、中国系タイ人の主として住むワット・クット部落にあるため、また人口数もワット・クット部落が一番多い（259戸、1,319人）ために、ポー寺は財力においてクット寺に劣るらしく、建物の規模も僧の数も少ない。雨季の終わっていない10月の調査では、ポー寺の僧は24人、デック・ワットは18人であったが、12月に入ると僧7人、見習僧4人、デック・ワットは9人に減少していた。総じて、ポー寺の規模はクット寺の1/2強と言ってよいであろう。

(3) ワット・クット小学校とワット・ポー小学校

すでにふれたように、バンケム村には7年制の小学校が二つあるが、通学する生徒たちは、必ずしも行政区としてのタムボン・バンケム内に居住しているわけではない。タイの校区ない

し学校群は「クルム・ローングリーエン」とよばれるが、この地方ではバンケムを含めた三つのタムボンが学校群を構成し「クルム・ローングリーエン・バンケム」（バンケム学校群）とよばれている。三つの村（タムボン）から構成されながらバンケム学校群という名がついているのは、この校区に含まれる小学校9校（バンケム村2校、フェローン村1校、ノン・チュボン村6校）のうち、7校が4年制で、7年制は2校しかなく、その2校ともバンケム村におかれているからであろう。つまりバンケム村は、この付近の小学校教育の中心と言ってよい位置を占めているのである。学校群は、その群内の校長の間で代表者を1人決めるが、われわれの調査当時は、ポー小学校の校長が選ばれていた。7年制の2校間には相互に教師の交換があり、他の4年制をもつ7校の間にも、円環状に教師の移動交流が行なわれているという。児童が入学時に校区内のどの小学校を選ぶかは自由であるが、一般には自宅からの距離が最も近い学校が選ばれているようである。ワット・クット小学校は仏暦2466年（西暦1923年）に創設され、現在生徒数540人、ワット・ポー小学校は仏暦2482年（西暦1939年）の設立で、現在生徒数443人である。他に、ワット・ポー小学校には「チャン・デック・レック」とよばれる保育所が設けられており、5才6カ月以上の幼児を毎年35人受け入れている。

Ⅲ ワット委員会・学校委員会と寺・学校の財政

さきに、寺や小学校のような組織は、そのままの形では現実の‘世俗的’問題、特に金銭上の諸問題の処理に不都合の生ずることが多いのではないかという意味のことをのべた。このような問題を探っているうちに、われわれは、タイの寺にはワット委員会、小学校には学校委員会とよばれる極めて能率的な組織（カナカマカン）があることに気がついたのである。ところで、この種のカナカマカンの機能を理解するためには、タイ人の行動の背後にある宗教思想について、若干ふれておく必要があるように思われる。

タイ農村の住民にドミナントな宗教的価値観があるとすれば、ピー信仰などのアニミスティックなレベルでのそれをのぞくと、やはり仏教にもとづく「タムブン」の思想をあげなくてはならない。タムブンの思想は、在家者の宗教観念の中心をなすものであり、タイの寺は、民衆のこの「タム・ブン・タム・タン」（善行を積むこと）の行為によって基本的に支えられている。タイの寺はサンガとよばれる出家者の集りであるから、出家者である僧たちは、超世俗的生活態度を持する上から、経済的に自立することができない。こうした寺の経費や僧の実生活を経済的に支えているのが、在家者であるところの一般の民衆である。民衆は罪過ないしは悪徳としての「パーブ」を避け、供養ないし功德としての「ブン」を増やすため、機会あるごとに個人として、また家族や団体で僧をもてなし寺に寄進する。タイの仏教組織には、わが国のように檀徒組織はなく、原理的には在家者のすべてが信者であり寺の支持者であるといえる。現実には、主として寺の周辺に住む住民たちが、寺の経費、僧の生活費、必需品を支えている

のであるが、僧個人や寺の名声、村人の友人関係などによって、かなり遠方からの寄進者も多い。たとえば1970年11月7日にポー寺でおこなわれたカチン祭で寄進された金額（現金のみ）12,583バーツの地方別内訳は

ペップリとバンケム	7,400バーツ
ラップリ	2,366 ク
バンコク	2,817 ク

となっている。地元のバンケムとペップリが一番多いとはいえ、30キロ北のラップリ地方と140キロも離れたバンコクからの寄進額の合計は全体の4割を占めているのである。しかし、檀徒組織がなく、原理的には在家者のすべてが信者であるとしても、ただそれだけではサンガへの寄進は限られており、寺の財政の潤沢をはかる上で寺側はあまりにも受身であるといわねばならない。寺への寄進は、年間を通して特に何時でなくてはならぬという決りはないが、それが最も多く集中するのは前記カチン祭であり、ローイ・クラトン祭、新年祭、学校祭などの祭の時期である。つまりこれらの祝祭日は、寺がより多くの寄進を獲得し、寺の財政基盤をより堅実にするまたとない機会なのである。そのためには祭をより「スヌック」（楽しい）なものにし、より多くの民衆を集めるための演出者が必要である。寺の財政という観点からすれば、本論の主題であるワット委員会や学校委員会の最も重要な機能は、寺や学校の主催する上記のような式典や祭を主催し、寺や学校に財政上の潤をもたらしことであろう。

歴史的にみれば、タイの子弟の教育は、もともと寺で僧の指導のもとにおこなわれており、1898年の国家教育体制の採用、1921年のラマ六世による義務教育令の施行によって次第に近代教育体制が整備され、寺と学校教育は次第に分離されてゆくのである。しかし地方村落における寺と小学校の関係は依然として密接で、特にこれは財政の上で顕著である。このことはワット・クット小学校、ワット・ポー小学校の校舎建築の歴史（特に財政上の歴史）を記した次のような資料をみてもあきらかであろう。

「ワット・クット小学校（建築）の歴史」

ワット・クット小学校は、2466年（1923年）8月15日創設された。カオヨイ郡々長プラテップ・キリサムット・タケがこの学校を創った人である。当初の30年間、学校はクット寺のサーラを校舎として使用した。2499年（1956年）に最初の校舎が建築された。政府からの補助100,000バーツ（約150万円）、地元の負担金が同じく100,000バーツであった。2501年（1958年）2月1日さらに37,000バーツで別の校舎が建てられた。この建築費用は学校祭からのあがりでまかなっている。次いで中学校校舎（注；当時の matayom 1, 2, 3 を指すと思われる。筆者）建築の費用を必要とし、2502年（1959年）7月10日、これを文部省に申請した。しかし、文部省から支給された金は、小学校々舎の建築に当てられた。2505年8月10日さらに別の校舎ができた。政府より15,000バーツ、学校祭より19,380バーツを得たが、学校祭からの利益は中学校用にまわされた。2506年（1963年）に3室からなる校舎ができた。政府から40,000バーツ支給され、村人から20,000バーツの献金があった。この校舎は2506年6月25日に完成している。2509年（1966年）9月13日に工作室が完成したが、この時は政府より16,000バーツが支給された。しかし、装飾品その他を学校が購入しなければならな

かった。同年、学校は5年生から7年生までの校舎を建築するために、3,500 パーツで土地を購入した。2511年（1968年）に教師用の家を建築するため政府より20,000パーツの支給を受け、同年8月12日これを完成した。

「ワット・ポー小学校（建築）の歴史」

この学校は仏歴2481年（1938年）に、ワット・ポーの僧侶長や村長、各部落長そして村民によって創設された。予算1,885.55パーツで校舎が建てられたが、これは天井も壁もない不完全なものであった。開校式は翌1939年6月2日に、カオヨイ郡の教育官によっておこなわれた。政府は同日校長と3人の先生を任命した。当初生徒がいなかったのに、既設のワット・クット小学校、ワット・ノンソン小学校からも生徒が分かれて通うようになり、ノン・ボア部落からも生徒が来た。ノン・ボア部落の生徒は、これ以前は学校に通っていなかった。1年生から4年生までで、バンケム村第2パチャンバン小学校とよばれた。学校の経費は政府からきた。1941年5月1日、政府は校長を他へ転任させ、新任の校長を任命した。この頃生徒数は増えたが、児童の一部は寺で勉強しなければならなかった。（生徒は2分されていた。）1942年5月24日に校長がまた替り、これが現在の校長である。この校長は新しい校舎をつくり、天井や壁をつくり、教室を分けるよう最大限の努力をした。これには5,700パーツが用いられた。僧侶長は個人の金1,000パーツを与えた。1955年には12,470パーツで本建築の校舎が建てられた。翌1956年には集会をもち、父兄の献金4,922パーツが集められた。この金は他の校舎建築費にまわされた。次に、資料棚、椅子、テーブルなどが整えられた。また、国旗掲揚柱のまわりに垣根がつくられた（1,890パーツ）。1957年に3,000パーツをかけて校舎をペンキで塗った。1958年から1960年にかけて小学校からハイウェーまでの1キロメートルの道路を、寺の援助で1,500パーツをかけて改良した。1961年、1962年には新年祭を行ない、父兄を招待し（注：父兄から金を集めたことを意味する。筆者）、1962年の終りまでに新校舎の建築をはじめた。予算は50,556パーツであった。1963年5月17日に校舎はできた。50,556パーツの中の一部は政府からきている。同年同校舎を教生の宿舎に改良するために、1,846パーツを用いた。同年さらに校舎を建築し、71,209パーツを費やしたが、このうち25,000パーツは政府から、他は主としてカチン祭からである。新校舎は1963年12月28日に完成した。

同年、古い校舎は取りこわされ、カチン祭の利益金で新校舎建築用の資材を購入した。2507年（1964年）に建築にかかり、2508年の9月10日に落成した。この時100,112パーツがかかったが、うち30,000パーツは政府からである。1965年から、ワット・ポー小学校は7年制教育をはじめた。当時5年生が35人いた。この年2,500パーツをかけて椅子200個をつくった。1966年さらに3,000パーツをかけて机40、椅子40をつくった。さらに別の校舎をつくるために材料を買いあつめた。この建物の予算は40,000パーツ（うち政府より20,000パーツ）であった。建物は1967年9月1日にできた。

この記録は、ワット・ポーの僧侶長、僧侶、教師、村民、学校委員会によってつくられたものである。

以上は、ワット・クット小学校、ワット・ポー小学校の職員室近くに掲示されてある資料からとったもので、校舎建設の歴史を、主として建築に要する経費の上からあらまし述べたものである。この短く不完全な資料からもタイ農村における寺と小学校の密接な関係をうかがい知ることができるし、村人の献金や祭からの利益金が、校舎建築上いかに大きな比重を占めているかがわかる。資料の中に、学校祭、カチン祭、新年祭などから校舎建築の費用が拮出されたという部分があるが、この祭をかげで演出するのがワット委員会、学校委員会なのである。こ

の両委員会相互の関係と、寺＝学校の関係を検討するために、新年におこなわれる学校祭の内容を分析してみることにしよう。

1971年のワット・クット小学校の学校祭は、1月13日から15日までの3日間おこなわれている。祭の行事は主として夜おこなわれ、非常にはでで賑やかである。校庭の近くの早目に刈りとられた田に柵を設け、中に舞台をつくり、ここで舞踏、古典劇などが催され、別に映画も上映される。またバンコクからは職業的バンドもよばれてきて、注文に応じて曲を演奏する。この間レコードによる流行歌が拡声機を通して村中に響きわたる。そして飲食店を主とした出店が所狭しと立ち並ぶのである。このワット・クット小学校の学校祭は、当地方では年間を通して有名な催しのひとつで、かなり遠方から見物客がやってくる。入場料は5バーツで、これを払えば、柵の中で自由に映画をみ、音楽をたのしむことができるようになっている。こうした学校祭を計画し運営するのが学校委員会の任務である。ワット・クット小学校の学校委員会は、17年前（1954年頃）に、上記学校祭が始められるようになってから、学校祭を企画運営するためにできたもので、1971年の場合は70人（57人ともいう）の委員から構成されていた。学校委員会のメンバーになる資格は、委員になることを希望する男女で、現委員の推せんがあれば誰でもよい。しかし各委員は、学校祭の基金として200バーツを出資しなくてはならぬので、多少の経済的余裕をもっていることが必要となる。ワット・クット小学校の学校委員の多くは、当小学校の卒業生で、平均年齢は約20才であるという。委員会には議長のほかに会計や会場係などの役員がおり、ワット・クット小学校長や教師の多くも加入している。現在の議長は元のワット・クット小学校長で、現在のノン・ソム小学校長である。このように学校委員会は、学校祭を対象として構成される組織であるから、学校祭が企画された時点で校長によって招集され、学校祭がすみその事後処理が終わると解散する。

ところでここで興味深いことは、学校祭からの利益金はそのまます学校へ納入されるのではなく、いったんは寺へ寄進される形をとることである。1970年1月のワット・クット小学校の学校祭では、約4万バーツ（約60万円）の利益金があったが、これはそのままクット寺へ寄進された。学校祭からの利益金を全額寺へ寄進するのは、2年前に委員会内でおこなった投票の結果で、それ以前は学校へ直接寄付されていたという。しかし、いったん寺へ寄進された金は、クット寺のワット委員会によって再配分され、適当な額が小学校へ還元されることになっている。学校祭の前に近隣の高僧数十人を招いて厳かな開会式をおこなうこと（この場合は、ワット委員会が主として式の世話をする）、学校祭からの収益金をいったん寺へ寄進し、そこから再配分されるのを待つ方法などをみると、小学校の財源を豊かにするための学校祭という行事もまた、タイ人のタムブンの思想に強くうらうちされたものであることがわかる。結婚式、新築祝、誕生祝などの折にふれ僧を招いてもてなすのは、タイで最もよく知られたタムブンの方法だが、ワット・クット小学校の学校祭の開会式に僧を招いているのもこれに当たる。学校の

財政を潤すためにおこなわれた学校祭の収益金を、いったん寺へ寄進する形をとったのも、さらに大きなブンを生むための行為なのである。

次にワット・ポー小学校の学校委員会であるが、この委員会はバンケム部落1, 2, 3の住民30人から構成されることになっている。当委員会の目的も学校祭を開くことである。学校祭は1月1日の夜におこなわれるが、その10日前に校長によって前もって選ばれ承諾されていた人々が委員として招集される。委員は20才以上の住民であれば誰でもよいが、実際には村長や各部落長、裕福な人々などが特に委員に選ばれる傾向があるという。元日朝の新年祭に次いで、夕刻から学校祭がはでに催されるが、ワット・ポー小学校の学校祭はワット・クット小学校の場合ほど大規模ではない。

こうした学校委員会との関係で注目されるのはワット委員会である。クット寺のワット委員会は、1970年現在30人で、委員長は「マカタイヨ」とよばれ、クット寺の僧侶長が在家者の中から適当な人をえらんで依頼する。マカタイヨは村人の中から委員を選び、委員会を構成するのである。ワット委員の年齢は学校委員より多少上で、25才以上の人から資格ができるという。狭いコミュニティ内のことであるから、ワット委員と学校委員とが重複するケースも稀ではない。ワット委員会の機能は、新年祭、4月の旧正月祭、カオパンサなどに際してこれを世話することである。ポー寺のワット委員は全員バンケム部落2からでており、ワット・ポー小学校の校長が委員会の議長である。委員会の機能はクット寺の委員会と同じで、祭その他寺が中心となる大きな行事の度に集まり活動することである。このように、ワット委員会の機能は、世俗的な動きをしにくいサンガのメンバーに代わって、寺の年中行事を開催し、寄進を促進し、集まった金を管理し、支出を決めること、つまり主として寺の財政上の問題を処理してゆくことにあるから、委員会の規模は、寺の規模とは別に寺の必要度に応じて大きくなることがある。1968年にバンケム部落1（いわゆるバン・クルォイ部落）地区に新しくバン・クルォイ新寺が創られたが、この寺は新寺であるため財政的に貧弱で、まだ本堂すらできておらず、僧11人、見習僧1人、デック・ワット5人という小規模の寺である。にもかかわらず、60人（10人の女性を含む）のワット委員がおり、積極的に寺の発展のために尽しているのである。土地の購入費や僧房の建築費などで、これまでに約100万バーツを費やしたが、資産家からの借金以外の多くは、バン・クルォイ部落の住民からの寄進やカチン祭などの折にワット委員会が活躍して集めた献金によっているという。ちなみに、筆者らの調査時のカチン祭での利益金は約2万バーツであった。寺にはペブブリ市内の資産家からの借金がまだ20万バーツほど残っているらしいが、寺への融資は普通無利子で、債権者は利子を取りたてないことによってブンを積むことになっているのである。

さて、以上の記述からも明らかなように、ワット委員会と学校委員会は、タイ村落における寺と学校という2大‘親’集団の財政をうらで支えている極めて重要な補助的カナカマカンで

ある。またこの両委員会の性格を分析することによって、タイ農村における寺と小学校の微妙な相互依存の関係の一端を明らかにすることが可能であろう。タイ農村の小学校のほとんどは寺に隣接して設けられている。というよりも、寺の所有する敷地内に小学校が建てられたというほうが、歴史的事実をのべていることになろう。かくして、既に度々触れてきたような祝祭日における行事や祭は、小学校の校庭とも寺の境内ともつかぬ広場（多くは寺と小学校の建物に囲まれた広場）で催されるのである。財政の上からいえば、寺は小学校を通してその世俗的力を利用し、小学校は寺の宗教的力を利用しているともいえる。両者の利益は相補的であるが、学校委員会が主体となって行なった学校祭の利益金が、いったんワット委員会へ渡されることにみられるように、新年祭も学校祭もカチン祭も、すべてその行為のうらにブンを積む思想が脈うっていると理解しておくことが肝要であろう。その意味ではやはり、寺>小学校、ワット委員会>学校委員会というステータス図式がなりたちうるだろう。また、ワット委員会と学校委員会は、主として、寺と学校の財政を豊かにするために設けられた組織であるが、祭や式典を盛大に主催することによって、住民の関心を寺や学校へ向かしめ、間接的ではあるが、寺や学校本来の宗教的、教育的機能を促進する役割を果たしていることも見落としてはならない。

む す び

以上、タイの農村コミュニティにおける3大‘親’集団（家族、寺、学校）のうち、寺と学校の二つをとりあげ、両者の関係を、ワット委員会と学校委員会という補助集団の財政的機能を通してみてきた。このことから、またこれまでのタイ調査に関する知見から、筆者は、タイ農村の集団には次のような三つの特色があることを指摘したいと思う。そのひとつは、タイの農村には、一般に血縁集団としての家族、宗教集団としての寺、教育集団としての学校という3大‘親’集団があり、他にはこれに比肩しうるほどのめばしい社会集団がみられないこと、つまり集団のあり方が寡頭的であること、第2は、以上の3大親集団の機能的単純性を救うために、補助的＝副次的＝臨時的集団がその周囲に派生しやすいことである。第3の特色は、こうして派生した子集団（補助集団）は、成長して親集団から独立してゆくことが少ないこと、また子集団がさらにその子集団を生むという‘セクト的’形態を一般にとらないことである。すでにふれたように、タイ農村の家族は核家族が一般的で、それ以上大きなものでも、せいぜい3世代を含む小型の直系家族がみられる程度である。だが、それは彼らの間に親族関係がみられないということの意味するわけではない。冠婚葬祭や共同労働などの必要に応じて、こうした関係が顕在化する性格をもっているのである。ただし、そうして顕在化した‘親族集団’の組織性ないしは集団としての結びつきは固定化したものは少なく、きわめて緩いのが普通で、事に応じて強化され、変形し、解体する性格をもっている。稲刈などに際して組織されるチェエイ・カン・グループには、バンケム村で調査した限りでは3種類（親族関係を中心としたも

の、近隣関係を中心としたものおよび青年男女を中心としたもの）があるが、親族を中心としたチュエイ・カン・グループにも、他人が入りこむ場合がいくらかでもありうる。「チューア・ディアウ・カン」（同一血縁）、「クルア・ディアウ・カン」（同一のカマド）、「ピー・ノン・カン」（兄弟関係）などと呼ばれる親族集団も、強い内的結合関係をもって機能する集団としての働きはもっており、緩い親縁関係がみられるにすぎない。親の家族を中心として、同一敷地内に子供の家族がいくつか集まり住んでいる場合もある。しかし、こうした共住的家族群は、農耕経済に関しては共同しているが、血縁集団の単位としてこれをみとめるかどうかは検討を要する。Kaufman が、タイ農村の家族を the spatially extended family, the remotely extended family, the fictional family に分けて説明しているのも³⁾、タイ農村における小家族ないし核家族以外の親族集団の捉え難さを物語っている。つまり、タイ農村の親族集団では、それが形態としても機能的にも明瞭なのは核家族なのであり、他の親族関係は有事には顕在化するが、普段は、集団とは認められない程度の結びつきをもって潜在しているものといえるだろう。これを要するに、家族という血縁集団を‘親’として、必要に応じて、補助的‘子’集団を手足のように派生させる形態をもっているとみなしうる。

寺の場合も、‘親’集団としての寺が、必要に応じて様々な子集団を周囲に配している点は同じである。恒常的なものとしては、僧の日常生活を助けるデック・ワットの集団があるが、この集団も、雨季に増え乾季に減る僧の数に応じて増減するきわめてフレキシブルな性格をもっている。随時形成されるものとしては、すでに分析した、財政を助けるワット委員会などをあげることができよう。このような集団形態は、小学校を親集団とするグループにもみられるのであって、財政を助ける学校委員会、課外活動と政府の政策とを体現した男生徒によるボーイ・スカウトや女生徒のレッド・クロスなどは正に、親集団としての学校から派生した子集団なのである。アメリカや日本などのボーイ・スカウトが、学校や行政組織から独立した民間の団体であるのに反し、タイのボーイ・スカウトは文部省に本部をおき、県、郡、村などの行政単位と対応した形で、各小学校に付属して組織化されていることに注目すべきである。郡単位でいえば、郡のボーイ・スカウトの最高責任者は行政官としての「ナイ・アンプー」（郡長）である。

もちろん、補助集団の存在そのものは、特にタイ農村における集団形態の特色というわけではない。日本の小学校におけるPTAや寺の檀徒集団も、親組織の機能を助ける子集団といえるだろうし、アメリカでいわゆるオーグジリアリー（auxiliary 補助の）と呼ばれる組織は、文字通り親組織から派生した子集団をさしている。たとえば「イースタン・スター」は、結社「フリー・メーソン」の婦人補助組織 women's auxiliary であり、「コロンブスの騎士団」

3) Kaufman, H. K. 1960. *Bangkhuad : a community study in Thailand*. N. Y. pp. 21-25.

はカソリック教会の子集団である。アメリカの小コミュニティにおける男子集会所の役割を果たしている「消防隊」や「在郷軍人会」「VFW」などにも *women's auxiliary* がある。だが、日本の村落社会における補助集団が、原理的に親族類似の性格を内包し、いわゆる「家族的」に構成され、アメリカのそれが、個人と個人のヨコの同志的契約の原理にもとづいて形成されがちであるに反し、タイ農村の集団は、家族関係を擬制したタテの友人関係を原理として形成されているというちがいがみられるようである。こうした問題に関連して想起されるのは、丸山真男による日本とヨーロッパの集団形態の比較である。⁴⁾ 彼は、西欧の集団を長い共通の文化的伝統を根にもった上で末端がたくさんに分化しているとみなしてこれを「ササラ型」と名づけ、これに対し、日本の場合は集団がヨコに連絡のない閉鎖的なものになってしまうという意味で「タコソボ型」とよんだ。丸山の問題としたのは、近代市民社会における機能集団の分化についてであるが、日本とヨーロッパ両文化における農村社会の集団の多元的な分化についても、当てはまるのではないかと思う。筆者のみるところ、タイ農村の集団のあり方は、丸山による以上の2種類のいずれにも当てはまらない。タイの場合は、仏教という共通の文化的伝統が根にあるという意味で西欧型に近いが、「ササラ型」のような集団のセクト的分化は少なく、各集団の組織としての独立性が弱いというちがいがある。したがってタイの場合は、比喩的にいえば共通の文化的伝統をもった母体から補助集団が幾つも派生し、それが極めて柔軟な性格をもっているという意味で、とりあえず「クラゲ型」ないしは「球根型」とでも名付けるべきであろうか。タイ、日本、アメリカにおける集団形成の原理については、改めて精緻な検討を加える必要があるが、ここではタイ農村の集団形態が寡頭＝補助集団的であり、日本のそれは、タイ農村の場合より多頭＝閉鎖的で、タテに系列化された形態をもっていること、アメリカのそれは、同じく多頭的ではあるが、分裂しながらヨコにいくらかでも増えてゆくセクト的性格をもっているのではないかということ指摘するにとどめたい。

もちろん、本論で検討しえたのは、タイ農村における寺と学校から派生した補助集団としてのワット委員会、学校委員会の形態と機能であるから、これをもって他のすべてへ敷衍することは早計である。しかし仮設としてタイ農村集団の寡頭＝補助集団的形態と、こうした諸集団をうらで支える、共通の強い仏教的価値志向の存在を指摘し、今後のタイ社会における集団研究の手がかりとしたいと考えている。

4) 丸山真男、1961.『日本の思想』岩波書店、東京、p. 137.